

伊豆市未来づくり 個別セッション

「次代を担う人づくり」 第3回(2014/9/28 実施) 発言要旨

(敬称略)

| | | |
|------|----------------------|---------|
| 座長 | 相模女子大学学芸学部 子ども教育学科教授 | 久保田 力 |
| 有識者 | 小田原短期大学保育学科准教授 | 菊地 篤子 |
| 市民代表 | 修善寺温泉場まちづくり検討会 | 原 京 |
| | 社会教育委員長 | 澤木 育子 |
| | 静岡グッドトイ委員会代表 | 田足井 みさ子 |
| | 伊豆市議会議員 | 青木 靖 |
| | 行政改革推進委員 | 佐藤 傳 |
| | 行政改革推進委員 | 宮地 あけみ |

市長 ○皆さん、こんにちは。ユネスコの会議で1週間ほど時差が真逆のカナダ東端にあるセント・ジョンに行っていたが、日本はいいところだなあとつくづく実感した。セント・ジョンは、8月の平均気温が22-23度で9月の下旬には最低気温が零度に近くなるほど寒いところで、土日は喫茶店もレストランも全く営業していないし、ホテルの水は濁っていてシャワーを浴びるのもはばかりされた。それに比べて我々は世界で一番住みやすい東海地方に住んでいるのに「ダメだ」と言い続けている。この違いはいったい何なのだろうと考えさせられた。

○ただ一つきわめて違うのは、北米で初めて世界ジオパーク認定を受けたハンマーストーン・ジオパークでは国際連携を北太西洋で築いていることである。カナダの東海岸のハンマーストーンから、アイスランド、スコットランド、デンマークまで数千キロに及ぶ広大な連携ができていて国際貢献できる。我々は50キロしか離れていない近隣の町ともまとまりがないと言われているのに、向こうでは当然のように数千キロの国際連携を確立しているのだ。

○セント・ジョンでもまたカナダ全体でも日本と同じように人口減少が進んでいる。しかし、それを解消するために移民を歓迎するとイギリス系の白人の市民が堂々と発言している。中国人でもベトナム人でもレバノン人でも誰でも大歓迎で、我々とは価値観がかなり異なっている。逆にそうしないと国が成り立っていかない、カナダという国の成り立ちでもあった。これに対して伊豆半島ではどこの国の人でも歓迎するとしないと存続できないのか、伊豆市の地域としての本来の姿や将来の姿はどうなのか、こうしたことについても考えさせられた1週間だった。

○この「未来づくりセッション・次代を担う人づくり」は本日が最後になる。最終的な提言内容ともかくとして、伊豆市のこれからの10年を考えるための有効なヒントを整理してもらえればと思う。

座長 ○こんな天気の良い日曜日に時間をいただいて感謝する。市長から話があったように、10年後の伊豆市を見据えて、考えていかななくてはならないことは何か。これを人づくりの側面と、財政と成長戦略の側面の2つの論点からそれぞれ話し合っているのが、この「未来づくりセッション」だ。配布された「テーマ検討シート(検討シート)」はこれまで議論、検討した内容をまとめたもの

で、本日はこれを参照しながらフロアの参加もいただいて進めていきたい。

○10年後の伊豆市について考えることはそれ以降も伊豆市が存続していることが希望だが、実際には財政や人口流出の問題がある。静岡県は人口減少数が全国で2番目に多い県で、伊豆市でも人口減少が続いているので市の存続も危ないと危惧する声もないわけではない。そこで自分たちのふるさとである伊豆市を守っていくために、人づくりの観点から課題を整理しようというのがこのセッションの目的だ。



○これまで委員から提言された内容が検討シートにまとめられている。必要な項目がすべて列挙されているわけではなく、提案しきれていないものや、さらに掘り下げておかななくてはならない論点もある。こうした点も含めて、本日は人づくりセッション最終回の議論を進めていきたい。

○今回初めてセッションに参加している人もいると思うので、これまでの議論の内容について簡単におさらいしておきたい。まず、伊豆市は皆が望んでできた市なのかという問いがある。市長の言葉を借りていえば、「行政組織のリストラクション(再構成)」のために平成の大合併という国家政策のもとで旧4町が1つにまとめられて合併後10年で形としての伊豆市は整えられてきた。ところが各人の気持ちの中で伊豆市が確かにできあがっているか、これがこのセッションの問題意識の出発点にある。誕生後10年を経ても旧4町がそれぞれ独自の伝統や文化を持ち続けている。それを伊豆市というスローガンの下で統合したり画一化することはできない。それでもなお行政単位としての伊豆市は明らかに存在していて、モザイク模様のような伊豆市を自分たちの居場所として、制度の上だけでなく精神面としても作り上げていかななくてはならないだろう。その時に課題になるのは何か、これをこの先の10年、本気になって考えていかななくてはならない。こうした時期に来ているといえる。

○第1回目のセッションで私が提案したように人づくりの観点から考えるにあたって重要なのが、それぞれの住民が、伊豆市に所属している、伊豆市に帰属する伊豆市民であることをしっかり認識できているかだ。これは旧4町に関係なくできていなくてはならない。そして伊豆市が良いところだ、ここを好きで自分たちが守っていききたい、こうした意識を育てていく、この点が大切だ。これを念頭に置きながら、委員の皆さんがこれまで行ってきた活動にもとづいて提案した内容を検討シートにまとめた。思いつくまま散発的に出された提案なので、次元が違うもの、直接あるいは間接に関係する内容が玉石混合に混ざり込んでいる。わかりにくい部分もあるので、フロアからも遠慮なく質問していただけるとありがたい。

○伊豆市として、こういった市民に育ちましようという「伊豆市の市民憲章」を創る提言もされたが、ここでは具体的な内容までは議論できない。先ほど市長から聞いたが、伊豆市で先日開催された子ども議会で発言した子どもの1/3が伊豆市の良いところとして「自然」をあげていたという。ここから考えると、伊豆市の市民憲章でも、子どもを対象にした「伊豆っ子宣言」でも、「自然」がキーワードに入ってくるといえる。上手く整理されていないところも多々あると思うが、だからこそ本日さらに意見をいただいてまとめ上げていきたい。

○「木育の推進」を提案された田足井さんに伺いたい。木育というきわめて具体的な内容が独立項目として検討シートにあげられている。なぜ伊豆市でウッドスタートなのか、土肥ならば海ではないのか。こうした点に触れながらアピールいただきたい。

田足井 ○私が現在持っているのが、おもちゃコンサルタント・マスターの資格だ。この資格は、おもちゃの専門家として子ども達に良いおもちゃを紹介したり、おもちゃを媒介して子どもやその家族、さらに障害者やお年寄りも含めて皆がつながっていくことを目標にする。

○木が見直されていることなどをきっかけに提唱されているのが「木育(もくいく)」だ。木があって単に遊ぶだけでなく、伊豆市にある木を活用してできることがある、こうした考え方に基づいて提案した。伊豆市には腕の良い木工職人もいる、間伐した木もたくさんある、木を利用して障害者施設などを造ることもできる。このように伊豆市には木に関係する環境が整っている。

○伊豆市では赤ちゃんの誕生祝に、現在は祝い金を渡しているが、たとえばこの金額の一部を使って伊豆市が赤ちゃんのために独自に作成した木製のおもちゃをプレゼントすることもできる。子育て支援では、木をふんだんに使った場所でサロンを開催する、木のおもちゃを提供する、こうしたことによって人は心が温まる。地元の木を利用するので地元の人々のつながりにも結びつく。木育は、子どもや子育てだけでなく、障害者や老人にもつながるものでもある。

○このほか、木育の指導方法を教える指導者としての木育インストラクター、廃校になった学校を提供してもらってそこに集まって木で遊ぶキャラバン隊などさまざまな方法がある。ウッドスタートを伊豆市の優先課題にするよう提案したのは、市がバックアップできる、木が特産である、こうした点を考慮したからだ。宣言することで伊豆市としてのまとまりが生まれることも期待できる。まずは伊豆市が「ウッドスタート市町村宣言」して考えていけばいい。



宮地 ○新しく何かを始めるのではなく、伊豆市には切り倒されたまま放置されている木も多く、地元がたくさんある木を有効活用する。この点からも「ウッドスタート宣言」はとてもいい提案だ。

○個人的な経験だが孫に木のおもちゃを作ってもらった。これはおもちゃというよりもただ四角いものなのだが、孫は木の匂いを嗅いで、その匂いの違いを肌で感じ取っている。このように感性を広げていく意味でも木育には広がりがある。

田足井 ○何かを始めるきっかけとして、まず私が思い当たったのが木だった。伊豆市でとなると理由づけがしにくいところもあるかもしれないが、土肥には海だけでなく山もある。現在活動を進めている「木育ひろば」では子ども達が、心が安定する、決まった遊び方だけではなく一つのものでいろいろな遊び方を工夫するようになる、人と人との関わり合いができる、こうした効果がある。一言で説明するのは難しいが実に奥深いものだ。

座長 ○前回、伊豆総合高校の生徒が説明した PBL 学習(Problem Based Learning、問題解決型学習)を伊豆市が特色ある学校教育の方策の一つとして取り入れていくのか、取り入れていくとしたらどういった方法があるのか、また PBL 学習は伊豆総合高校だけで実施されているわけではないので、敢えて伊豆市が小中学校の学校教育で問題解決型学習に注目したいというのであればその理由は何か。PBL 学習についての意見をいただきたい。

○「伊豆の風土にあった家庭教育の推進」とあるが、これはスローガンとしてはわかりやすいが、具体的にははっきりしない。この点について、青木さん、いかがか。

青木 ○検討シートの冒頭に「地域への愛着心の醸成」とある。座長は当初から、アイデンティティ(帰属意識)、プライド(自尊心)だと繰り返していたので、精神面のどこに軸足を置くのか、この点が最終的な持っていき場になると私自身は考えている。

○田足井さんが提案された木を使った教育も伊豆市に対する提案として悪くない。森林面積が大きい自治体は全国的にみても多いとはいっても、伊豆市の山林の面積はとても広い。「なぜ伊豆市なのか」という座長の質問に答えると、日本は東西にも南北にも長く、その土地にしかない木が多い。山にたくさんある木もあれば海辺にしかない木もある。その意味で土肥も絡められる。「これは土肥にしか生えていない木だ」とすれば地元意識につなげることもできる。切り口を上手く使っていけばいい。



○そこで大切なのが、どうすれば伊豆市に愛着心を持てるか、愛着心の醸成をいかにするか、だ。子ども達からは伊豆市が持つ自然を大切にしたいという発言があったが、北海道と比べて伊豆の自然はどこが違うのか、どういった独自性があるのか、こうした点についてここに住んでいる人はあまり考えることがない。これをジオパークという切り口でみることで伊豆半島の成り立ちが特別であることを再発見して再認識することができる。これほど素晴らしいものが地元にあったことをここに住んでいる人が確認できる。こうした再認識の過程を大人が経験しなくてはならない。子ども達に、地元を愛してもらい、伊豆市の市民で

あるというアイデンティティを持ってもらう、ここに住んでいて良かったという自尊心を持ってもらう、そのためには大人が伊豆の良さを教える必要がある。大人が伊豆市の良い点について子ども達と一緒に確認する、子ども達にそれを伝えて教えていく、さらには洗脳するといってもいい。伊豆が良いところだと伝えていかなければ子ども達は理解できない。伊豆の良いところを理解できてはじめて伊豆市を愛することができる。

○それには大人が子ども達を大切にするとところから始まる。私は、プライドは与えられるものだと考えているので、子どもの自尊心は大人が与えるものだといえる。大切に育てられた子どもはそれに対して感謝の念を持ち、プライドを持つ。伊豆の良さを大人とともに学び、こんなに良いところに自分たちは住んでいると思うようになる。このセッションにはいろいろな方が集まっていて、それぞれが伊豆の良さを確認する活動を進めている。それを子ども達にいかに伝えていくか、ここが重要だ。

○このセッションで当初から提案されていた「伊豆っ子宣言」や市民憲章にこうした点を盛り込みながら、大人が子ども達とともに伊豆の良さを再発見し再認識して、それを子ども達に伝えていく共に守っていくことだ。この点を問題解決につなげるならば、私たちは果たして地元の良さを知っているか、住んでいる伊豆はとても良いところで他とどこが違うのか、そしてそれをどう守っていけばいいのか、このようにつなげていけばいい。

○家庭教育については、家庭で芽が出ないと学校でも芽が育たないので、やはり親が重要だ。親世代は仕事などで忙しいと思うが、親がまず子どもに伊豆の良さを伝えていくことだろう。

座長 ○青木さんから、子どもに伊豆の良いところを伝えていくのは親の責任であるという話がされたが、「伊豆の風土にあった家庭教育の推進」をもう少し読み解いていきたい。ほかの委員の方、いかがか。

原 ○田足井さんと宮地さんが説明された木は自然環境の問題とも関係する。木を十分利用して森林を整備していけば土肥の海も豊かにする。海藻おしば(押し葉)の第一人者である野田三千代先生が話しているように、伊豆半島は海藻の種類が全国一豊富で生物多様性を極めていますが、これは森から生まれてきたものだ。狩野川は太平洋側で唯一北上する河川であり、狩野川の上流に位置する我々にはこの自然環境を守っていく義務がある。伊豆市では市民に上流意識を持ってもらうようにすればいい。

○子ども達が言う伊豆市の「自然」について私が思いついたのはボーイスカウト活動だ。この中にも経験された方もいると思うが、自然とともに生きる力を身に付ける「ちかい・おきて」があるボーイスカウトの教育には伊豆市に適した要素が含まれていると思う。伊豆市の教育にも誓いがあって、掟を守る、市民憲章や宣言にこうした要素が盛り込まれていけばいいのではないかと。

○家庭教育では、伊豆市全体となると難しいかもしれないが、修善寺温泉に弘法大師が親孝行のために掘った「独鈷の湯」という温泉がある。私は、家庭教育の基本は親孝行だと考えていて、伊豆市が親孝行宣言することもいいと思う。「親孝行日本一の伊豆市」として、みんなが親を大事にする、これが始まりであってほしい。大人が先祖や祖父母を大切にする姿を子どもに見せつける、親同士が朝起きたら互いに挨拶する、先祖に手を合わせる、普段からこうした姿を親が子どもに見せていくことだ。青木さんが指摘したように、日常会話の中で親がさりげなく伊豆はこんなに良いところだと子どもに伝えていく、これも家庭教育の基本だろう。



座長 ○伊豆の良さを大人が理解しているかという心配なところもある。私は教育学とは全く関係がないのに講義の中で学生に狩野川は変わった川だと話をする。北に流れる川は他にはなく、伊豆半島は昔は太平洋にあって徐々に移動して本州とぶつかって今はここにあるが、今後長い年月を経ると新潟あたりにあるかもしれないと話す学生は驚く。ジオパークにせっきやく認定されてもその意味やありがたみを大人が理解できないと子ども達には伝わらないが、伊豆半島はプレートテクトニクスの典型と言われていて、地震がいつ起きかわからない問題はあるものの、非常に面白い地域だ。

○「学校教育の縦横連携の促進」について澤木さんに伺いたい。具体的にどのように進めていけばいいのか、伊豆市には大学はないので小中高の連携になると思うが、いかがか。

澤木 ○伊豆市の縦横連携は、幼児教育も含めて、幼小中高で考えることになると思う。市民が伊豆市ならではの教育を進めたいという統一意見を持っているのか、まずこの点を確認したい。合併後 10 年を迎えて思うのは、旧 4 町がなんとなく一緒になったものの市民がそれを本当に望んでいたか、これは一人一人に聞かないとわからないが、10 年経って自分たちが伊豆市民だという覚悟は少なくともできているはずだ。

○私は、生まれてから高校まで、伊豆市の教育としての芯が一本必要だと常々考えている。親と子どもを大人層と子ども層と考え、それぞれが生きてきた時代によって吸収するものが違う。伊豆市に住んでいる誇りを持てる、ここだけはぶれないのが芯だ。伊豆市で生まれて大人に育っていく中で、これだけは失いたくないと思える理念、それが「伊豆っ子宣言」だ。賛否両論あるが

私はこれが必要だと考えている。自然で考えると、伊豆の中で一番すてきな自然は何か、これを真剣に考える、この伊豆市で生きていることに誇りを持てる、その芯をみんなで見つけていかなければならない。それを通じて伊豆市で育てたい最も基本となるものが表出してきた、それが幼小中高の一貫した教育の流れになるのではないか。

○土肥では通学合宿が非常に充実している。多くの住民が参加する体制ができている、住民参加の好例でもある。こうした良い事例をほかの地域も参考にできないか。それぞれの地域では難しい部分もあるが、土肥の事例から吸収できるものも多い。各地域が何を吸収するのか、これを教えるのも教育かもしれない。

座長 ○確かに、近いうちに幼稚園は機能的に保育園の中に取り込まれていくので、幼小中高で考えていくことになるだろう。幼稚園教育要領の5領域よりも、小学校就学前の子どもを対象にしたカリキュラムの伊豆市版を全国に先駆けてまとめてみるのも面白いかもしれない。世田谷区の保育など、自治体によっては幼稚園教育要領と保育所指針を統合する動きもある。このセッションで指摘された、自然、木、海などすべて含めて伊豆市版の就学前指針をつくるのもいい。

○教育委員会の関係者がいたら、伊豆市の教育として確立されたものがあるか、伺いたい。

教育長(フロア) ○伊豆市では、学校教育での義務教育の目標「ふるさと伊豆に誇りを持ち、夢やこころざしを持って、心豊かに生きる子どもの育成」を掲げている。これは大きな目標なので、「ふるさと伊豆に誇り」といっても何が誇りなのか、そうした具体的な内容からしっかり押さえていく必要があるという指摘もある。こうした意見も踏まえながら、ここで提案されている「伊豆っ子宣言」について考えていきたい。

○学校教育では、知・徳・体を押さえながら、家庭や地域から信頼される、子どもが楽しんで登校する、この2つの大きな柱の下に進めている。今後、幼稚園と保育園は子ども園に統合されていくことになると思うので、その中で就学前の子ども達にどう対応していくかが教育委員会にとっても重要課題である。今年10月末に狩野幼稚園で静岡県東部地区の研究会が実施される。幼稚園教育であっても伊豆市の15歳の子ども達にこのように育てほしい、幼稚園教育の段階で義務教育の最終年である15歳の姿をしっかり押さえておくことになっている。幼稚園教育であっても単に幼稚園だけの教育ではなく、いかにその後につなげていくかが重要だという共通認識がある。市教育委員会では、0歳から18歳の高校生までがつながった教育を実践する、こうした縦の教育連携を持って進めている。

○横の連携では、少子化で学校の数が減少する中、いかに多くの子ども達の中で教育をするか、これが伊豆市の課題だ。

座長 ○合併後10年経った伊豆市の教育目標を確認できた。統一目標があるので、「伊豆っ子宣言」を創っていくときに伊豆市の教育とどのように関わらせていくのか、この点が論点だ。

○小中学校の義務教育段階という前提だったが、高校卒業まで含める、少し長いスパンでの教育目標を掲げていくことも重要だろう。今後、6・3・3制も変わって学校教育制度が大きく変わる可能性もあるが、伊豆市で6~15歳あるいは6~18歳を見据えた教育が確立されていれば、市内に住む方が良いと考えるようになるだろう。

○前回セッションで発言してくれた高校生は伊豆市内にある学校に通う高校生だったが、実は問題は市外へ出ていってしまった高校生にある。後で菊地さんに指摘されて気づいたが、伊豆市

内にある高校の生徒だけでなく、伊豆市から三島市や伊豆の国市など市外の学校に通う高校生からも意見を聞いたかった。

○働くあるいは働きたい母親が多い社会的ニーズもあって、保育園が幼稚園を飲み込む時代になっていて、今後明らかに保育園の方が重要になっていく。伊豆市がそれを踏まえて、幼小中高ではなく、就学前と小中高で教育目標を立てていくと時代を先取りする印象がある。「教育の充実化方策の検討と推進」に集中してきたが、菊地さん、この中の「幼稚園教育 5 領域の伊豆市版の検討」について意見を伺いたい。

菊地 ○幼稚園教育要領が定める 5 領域を改めてあげると、健康、言語、表現、環境、人間関係であり、たとえば表現を育てる目標がある。人間教育の基本中の基本を育てるのが幼稚園教育で、人として生きていく上で最も大切なのが 5 領域だ。長生きするにも、人とコミュニケーションをとるにも大切で、5 領域をあげるよりもこれがどこかに入っていればいい、こうした理解である。

○これまで提案されたキーワードには、自然、先祖、親などがあったが、憲章や宣言をとりあえず作るのではなく、こういう流れがあってこれがキーワードになったという道筋を理解した上で憲章や宣言を作ることだ。富士市では幼稚園、保育園、障害者施設など市のいずれの施設にも玄関に富士市民憲章が掲げられている。富士市民憲章の 5 つの条文はすべて「富士山のように」で始まっていて、それが各施設に掲げられているので市民なら誰でも一度は目にする。市民に同じように意識させる、これが市民憲章の役割だ。

○「伊豆の風土にあった家庭教育」は漠然としているが、この中には親や自然が含まれるだろう。また人数が少ないことも伊豆市の特徴なので、対一、少人数だからこそ、といった人が少ないならではの表現があってもいい。自然ももちろん風土だが、第 3 回目になって何度も「人」という言葉がでてきたことからすると、人同士や人も風土の一つとして捉えるのもいいかもしれない。

○「学校教育における縦横連携」では、大人は縦横連携したい意識を持っていると思うが、私が重視したいのは、幼稚園の時に先生が言っていたことが小学校ではこのように教えられ、小学校で学んだことが中学校でここまで掘り下げられる、こうした関係性を子ども達自身が意識できるようにすることだ。これが明らかになる連携が実現できれば子ども達の伊豆市への愛着や自尊心の醸成につながる。大人が取り組みたいことは形に現れているように思うが、それが子ども達の中で上手くつながっていないとすれば残念だ。学校や幼稚園の教育現場の先生方が、これは小学校に上がればこのように勉強する、中学へ上がるとこんなことができる、このような縦につながる教育ができるようにすればいい。

○高校生では伊豆市に住んでいて市外に通学する高校生も多いが、市外の高校に伊豆市について教えるよう頼むことはできない。そこで何ができるかについて考えてみた。伊豆市では 18 歳で高校を卒業すると各地に離れ離れになってしまう子が多いので、高校卒業のタイミングで市側から同窓会形式で集まる機会を作ったり、市からメッセージを手紙で送るなりすれば、伊豆市を思うきっかけになって嬉しいのではないかと。私は周りにいる短大生を見ていて 20 歳を迎える若者が成人式の式典開催に向けて頑張っていることは知っているが、これをもう一歩前の 18 歳の段階で実施して、伊豆市について改めて意識する機会をつくる、これは学校教育の縦横連携の次につながる、最終地点になると思う。

座長 ○「高校生を対象にした寮の設置の検討」について佐藤さんから意見を伺いたい。実現可能性は別にして、このような発想はいかがか。

佐藤 ○私自身、高校から下宿で、息子3人も高校から下宿していた。私が高校生の頃は、朝早いバスの便がなかったために下宿しないと通えなかったが、今ではバスの便が良くなったので私が住んでいる八木沢からでも三島まで通学できるようになった。市長が東海バスと交渉してくれたこともあって、夜遅くまでバスが運行されるようになってきていることも助かっている。ところが最近では下宿が少なくなっていて、私の末の息子は野球をしたかったので夜遅くなる野球部員では受け入れてくれる下宿先を見つけるのにたいへん苦労した。座長はあまり肯定的ではないようだが、私自身は修善寺や大仁あたりに専門的に見てくれる高校生寮ができれば非常にありがたいと思う。私の長男は高校卒業後20年ほど経っているが、当時の仲間10人ほどが葦山に集まり相談相手になったりして良い関係を続けている。息子3人が下宿していたときには給料をそのまま下宿代として振り込むような状況だったこともあり、難しいかもしれないが安価であれば親も助かる。地域の話もできるので、いろいろな地域から集まる点もいい。私はこの提案に賛同する。

○今年の通学合宿は10月19日～25日の6泊7日で、小学4、5、6年の3学年を集めて、土肥高校の宿舎を借りて実施される。今年は9年目で、民生委員、保護司、老人会、食育関係者など組織的な協力もあって、述べ100人ほどの地域住民がボランティアとして子ども達の面倒を見てくれる。朝も5時頃から朝食の準備にあたってくれ、老人会から参加している80歳くらいの女性も楽しみながら協力してくれる。高校生は男子2名、女子2名が子ども達の勉強を見に夕方来て、一緒に食事をとったあと帰宅する。自宅ではわがままいっぱい生活している



子どもも多く、最近人間関係づくりが下手な子が多いが、テレビもゲーム機もないので工夫するようになる。何もない中で1週間過ごすのはとてもいい経験だ。夜の体験学習では、茶道体験に人気があり、お寺で夜のろうそくの光の中での座禅体験、指導者を招いてのアームレスリングなどもある。雑巾づくりでは自ら作った雑巾を使って最後に宿舎の清掃をする。今年は初めての試みとして、人権教育の関係で人権講座で話を聞く計画だ。子ども達も通学合宿をとても楽しみにしている。幸いなことにこれまで事故も起きていない。

○通学合宿は、静岡県下では2泊3日が主流で、毎年約160ヶ所で行われている。6泊7日の長期合宿は今年3ヶ所で開催予定だが、長く続いているのは土肥と牧之原市の2ヶ所だけだ。前回のセッションに参加してくれた三浦くんも、小学校の頃に自らも通学合宿を実際に体験していて、高校生になってボランティアで小学生に勉強を教えにきてくれた。

○「地域への愛着心の醸成」では、家庭、学校、社会がそれぞれ役割分担をしっかりとすること、目標も必要なので事前調査などを確実に行って目標づくりをしっかりと進めて目標設定することだ。

座長 ○通学合宿は土肥の地域住民や高校生の協力がないと動かせない。貴重なヒントがここにある。これが広がれば高校生寮にもつながる。高校生が伊豆市外へ行ってしまわないようにするための寮ではなく、高校生を伊豆市に呼び込むための高校生寮にすることもいい。温泉付きで割安料金にして修善寺にあれば最高だ(笑)。

○検討シートの左側について話を進めてきたが、市民憲章について市長に発言いただきたい。

市長 ○先日私がカナダで参加した会議の正式名称は第6回世界ジオパーク・ユネスコ会議で、

世界ジオパークの目的は観光客を呼び込む観光事業ではなく、ユネスコ(国連教育科学文化機関)の会議なので最終目的はユネスコ憲章の実現である。会議冒頭、説明されたのは、教育、科学、文化を通じて世界の安全と平和に寄与する、というユネスコ憲章であり、この理念を持たずして世界ジオパークに加盟してはならないことが強調されていた。国連憲章、ユネスコ憲章、日本国憲法、これらはまさにチャーター(憲章、宣言)であって、そこには理念がなければならない。

○伊豆市民憲章や伊豆っ子宣言を作るとすれば、打ち上げ花火できれいな文章を書いてそれで出来上がりではなく、伊豆市民が進んでいこうとする先を明確に示さないと意味のないものになってしまうと私自身は考えている。もし旧4町の文化を壊さないで伊豆市として共通するコンセプトを確立することができれば、それは次代を担う人づくりに結びつく。その対象が大人であっても子どもであっても、きわめて有効なものに成り得る。私はこれまで市民憲章の作成を検討したことはなかったが、今後は検討のヒントにさせていただきたい。

○高校生寮については、もし造るとしたら、私自身は高校生に限定にしない方がいいと考えている。たとえば、1階は障害者、2階は高校生、3階は社会人にして、男女も含め年齢も多様な人が集まる、リビングやキッチンなどを共有する、シェアハウスのような形態で駅前に造ることができないか。実現可能性がどこまであるか自信はないが、アイデアとしては考えたことがある。本日、出席している高校生にも意見を伺いたい。

座長 ○指名されたので高校生3人に発言をお願いしたい。



高校生1(フロア、伊豆総合高校・生徒会、3年女子) ○修善寺駅近くに年齢や性別に関係ないシェアハウスを造るという案を聞いて、介護士をしている私の母が高校生とお年寄りが交流する機会がないと話していたことを思い出した。市長が提案したような施設ができれば、お年寄りとの交流もでき、高校生がそれをきっかけに伊豆市に戻ってきたいという気持ちになる気がするので賛成する。

高校生2(フロア、伊豆総合高校・生徒会、2年女子) ○私も、高校生限定にするのではなく、障害者やお年寄りと関わったり話し合ったりする場が設けられるのはいいことだと思う。

高校生3(フロア、伊豆総合高校、1年男子) ○性別や年齢にとられない人々が集まる寮ならばさまざまな話し合いもできるし、みんなで生活すれば一体感が生まれるのでいい。

座長 ○貴重な意見をいただいた。来年度予算の策定で優先項目としてあげてもらおうよう、後で市長に頼んでおいてくださいね(笑)。

○ここで一旦休憩を取りたい。休憩前にセッション後半の議論の方向性について説明したい。前半では検討シートの左側にある幼小中高を中心に議論してきたが、このセッションのテーマは「次代」なので、対象は青少年に限らない。シート右側にある「若者の発言機会を確保」するのは、若者でない人達が言い出しにくい雰囲気を作っている、こうした意見があったからだ。青年期以

降の人達を対象にした人づくりも必要で、どういった工夫ができるかが論点になるだろう。

○次が「子育て世代が住みやすい基盤づくりと人材活用」で、これは子育て世代に向けた人づくりだ。子育て支援や少子化対策ならばエンゼル・プランから始まった長い流れの中での戦略だがこれはこのセッションの直接の課題にならないと思うので、子育て世代を対象とした人づくりのあり方に焦点を当てたい。

○このほか「療養保育の無料化を検討する」とごく簡単に記述されているが、お金は市が出すので後ほど財政担当者に聞いてみたい。



< 休憩 >

座長 ○後半は検討シートの右側部分に軸足を置いて話し合いを進めていきたい。本日の最初に「木育」について話されて、やはり木は伊豆市にとっては大切な宝であるという説明がされて私もなるほどと納得した。世代を超えた人づくりは、子どもや青少年だけでなく、大人にも関わる課題で、その中の一つが子育て世代だ。こうした観点から発言や提言をいただきたい。

○シート右側3番目の「市民参加の促進と効果的な情報発信」は上の2つと比べるとやや異質な印象も受けるが、伊豆市が持つ大人の文化にも関わってくる課題だ。これについても意見をいただきたい。

菊地 ○検討シートの右側の項目の方が前半で議論してきた左側部分よりも緊急性が高いと私は考えている。その理由は、子育てはリアルタイムで進んでいること、子育て中の人には数年で状況が大きく変わってしまうこと、情報発信力が案外強いのが子育て世代であること、である。こうした理由で右側部分を早めにはっきりさせたい、これが個人的な思いだ。情報発信は直接関係ないという座長の考え方とは私は少し違って、情報発信を上手に使えると大きな効果があると考えている。仕事を通してラインやブログからの発信力のすばらしさや恐ろしさを常々痛感しているので、子育て世代が情報を上手に広げてくれたり使ってくれたりするための環境づくりや下地づくりは重要であると私は考える。

○シート右側最初の「1.子育てを応援する活動の推進と魅力ある場づくり」は、伊豆市で子育てしたいと思えるようなまちづくりを目的に項目が列挙されている。下から2番目「療養保育の無料化」は医療費の問題で、母親たちと話をしていると最初に出てくる話題である。このセッションではあまり触れられないかもしれないが、母親の多くが高く関心を寄せるのが医療費の無料化だ。



○「1.子育てを応援する活動」の最下段「父親の積極的な子育て参加ができる環境の整備を進める」では、前回示されたアンケートにもあったが、当然のように「子育て＝母親」の構図なのがとても気になる。子育ては母親が担う家庭が多いので仕方ないところもあるが、これを母親ではなく「保護者」に変える、こうした認識から変えていくこと、これが重要だ。最近では母親に限らず、父親や祖父母などいろいろな保護者が子育てを担うようになっている。子育てを主として担う大人がさまざまになって、子育てパターンが多様化している。まずこの点から全体に意識を高めていくことだ。

たとえば、子どもが急に熱を出した時に幼稚園や保育園が真っ先に連絡するのは母親であることが多いが、父親の方が職場が近いなど、現実にはほかの保護者が連絡を受けた方が適当な家庭も少なくない。それでもまず母親に連絡がいくので、母親から父親に連絡しなければならない事態も発生してしまう。緊急の場合であっても、家庭に応じて臨機応変に対応する、この点を関係者が共通意識として持っていれば、とりあえず母親に連絡することにはならない。この子のどの保護者に連絡するかを考えるようになるはずだ。こうした意識を周りの大人が持つ必要があるだろう。

○親の役割は子どもの養護と社会化で、養護は世話をしたり育てたりすること、社会化は社会で生きる人間として育てることだ。後者の社会化も公的な育ちの意味で親の役割として重要で、両親だけでなく祖父母も社会人として人間を育てていく意識を持つことが必要だ。食事を摂ったり教育環境を整えたり清潔を保ったりする養護のほかに、社会に生きる人間を育てる、これが子育てであることを周りの大人が意識する、保護者が共有する、こうした観点も重要だ。

座長 ○子育て参加について市で何ができるか、休憩中に菊地さんと話し合ったが、国や県のレベルで対応できることと、伊豆市という市のレベルでできる内容はおのずと異なる。具体的に伊豆市で何ができるか、という考え方で議論したい。現実には伊豆市の父親は子育てに参加していないのか。ただ、これは世代によっても異なる。私は50代だが、私の世代では参加しているつもりでも外から見ると参加しているように見えなかったようだし、今の父親たちは園の行事に参加してビデオカメラを抱えていてもそれは実は表面だけで実質的にはどうなのか。父親と母親が完全に同等になることはないにしても、それでもやはり参加意識を平等に持つところは進んでやる、こうした子育てができればと思う。

○「保健師パワーを活用した包括的かつ専門的な子育て支援サービスを展開する」や「NPOなど民間の子育て支援活動に対する行政の後援システムを拡充」するといった項目では、行政の後援システムの拡充は宮地さんからの、保健師パワーは菊地さんからの提案だと記憶している。補足説明をお願いしたい。

宮地 ○私が提案したのはNPOだけではなくグループを対象とした支援である。私が仕事でちゃんと関わるのは、清水町、三島、沼津あたりが多く、そこでは母親の横の連携が取れていて

情報網が強く、小さなイベントや他の情報も紹介されて母親が参加するイベント等を選ぶことができるほどだ。清水町も含めて、沼津 - 三島間は距離的にも近く行き来がしやすい。伊豆市の場合は、距離がある上にイベントの開催自体が少ない。三島や沼津等で開催されるイベント情報を知らせることがまず大切だと思う。県の事業として沼津のキラメッセで開催された「ふじさんっこ応援フェスタ」についても伊豆市では知らない母親が多かった。若い人がパソコンやスマホを持っているのはあたり前だと私は思っていたが、30-50代で集まってこのセッションについて話し合った時にわかったのは、年収200万円程度であれば一家に1台パソコンがあればまだいい方だということだった。このような状況なので父親がパソコンを使っていれば母親はガラケーしか使えない、情報を容易に手に入れることができない。母親同士のコミュニケーションでは、伊豆市では家も遠く、集まることができる場もないために情報交換もできない。こうした実態をもとに私から提案したいのは、市が実施する健診をうまく利用するなどして、そこに集まってくる母親などに対して市から又はそれに代わる所から情報発信することだ。市が一般のものも含めて幅広い情報を提供する、こうした考え方で市が情報発信を進めるよう提案したい。伊豆市ではブログよりも情報拡散が早いフェイスブックをする人も少ないので情報入手そのものが難しいようである。メールでのやり取りはあるようなので、これを活用して、一般のイベントも含めて市で確認できた子どもに関する情報を、健診などを利用して配信確認をして、広く発信することを提案したい。



○沼津市近辺の母親4人が非営利で運営する「子育て応援サークルtasuki (た・す・き)」の活動を紹介します。サークル tasuki では自分たちで小冊子のフリーペーパー「tasuki 沼津発！子育てママにつなぐフリーペーパー」を作成して自発的な情報発信を展開している。この冊子には、メンバーが赤ちゃん連れで実際に行って良かったところに関する情報を掲載している。たとえば、赤ちゃん連れで行くことができる飲食店の紹介では自分たちが食事をして良かった店を紹介するといった具合だ。今号では沼津での「子連れアウトドア」を特集していて、メンバーで公園や香貫山を訪れて自らの感想も含めて紹介している。グループの活動費は、冊子に載せる小さな広告の掲載料やサポーター協賛(個人では1口1000円)の形で集めている。毎号3000部作成しているが、冊子が発行されると聞くと母親たちがすぐに入手しに動くので、あっという間になくなるほどの人気だ。発行部数を5000部に増やしてほしいという声もあるものの、メンバーが手で折ってホチキス止めする、すべて手作りなので簡単ではないし時間もかかるので部数増は難しい。困難があってもこうした情報誌を継続して発行している母親たちがいること自体がとても幸運なことだ。今号から伊豆市では若者交流施設 9izu に何部か置いてもらえるようになった。サークル tasuki の了承が得られれば、小冊子のコピーを取って伊豆市のどこかに置くことができるかもしれない。また集まる場があれば母親たちが気軽に相談ができるようになるとも考えている。

○子育てに関する情報発信が上手くいっていない、これが私の問題意識の根本にある。

菊地 ○前回提案した「保健師パワーを活用した包括的かつ専門的な子育て支援サービスを展開する」は、私が過去に伊豆市で子育てに関する仕事をしていた時の印象にもとづくものだ。伊豆市では子どもの数が少ないので保健師全員で市全体の子どもについて網羅的に把握できているという、とてつもないパワーを持っている。これは保健師に限ったことではなく、歯科衛生士、栄養士なども加えて情報を集めると伊豆市の子ども全員のことが明確にわかる。しかし、これをあ

たり前とってしまっていることが残念だ。これは伊豆市のような市でないといけない特別な状況であることを、まずアピールしたい。三島や沼津のような市では健診はベルトコンベアーのように行われていて、保健師も栄養士もそれぞれの子どものことを覚えているわけではない。そこから伊豆市に引っ越してくると、「こんなに関わってもらえるんですね」と感動される。このように伊豆市では専門的な子育て支援が既にできているので、それを自覚することだ。行政の中でも相互に支援し合っていくことができれば、それを伊豆市のウリにできる、このように考えて提案した。

座長 ○すべての世代を対象とした人づくりについて議論しなければならないのに、これまで議論されていない世代がある。たとえば生涯学習の考え方での高齢者を対象とした人づくりあるいは自分づくりについての提案がない。人間は死ぬまで学習すると考えればどの世代であっても同じ社会の中で生きている。伊豆市の中年や初老の方を対象とした人づくりではどんなことを進めていけばいいのか、こうした点について提案いただけるとありがたい。対象年齢を上げた時の人づくりとして提案いただきたい。

原 ○私自身も含めて高齢者が自分を高めるのは、それぞれが進めればよいと私は考えている。少子高齢化社会になって高齢者が多くなったことを逆に利用して、高齢者パワーを現在の子育て世代に向けるのがいい。高齢者や子育て世代より上の世代は、一度は子育てを経験している。責任をさほど感じることなく子育て参加することだ。自分の血縁だけでなく、近所でも子育て参加すればいい。私の店の従業員は孫が最近できたような年齢層の人ばかりだが、生後3か月くらいの赤ちゃんでも連れくる観光客に対して子育てについて口をはさむこともある。小さな子どもを連れてきた親が食事をしたい時に子どもがむずがることもあるが、店が忙しければ従業員が出ていって子どもをあやして親がゆっくり味わえるようにする。昔のあやし方だと親たちから感謝されることも多く、嬉しいことだ。こうした行動は自然に出るのだが、あまり責任がない関わり方を上の世代がするのであって子育て世代へのバックアップになる。高齢化社会だったら高齢者パワーを子育てなどに上手に使ってほしい。

澤木 ○私の地元は名前からして田舎の田舎の矢熊区で、毎年9月27日には地域行事として「道元忌」を行う。この祭事ではお寿司を地区の子ども全員の夕食として作っていて、その年の世話係が朝から夜まで世話をする。今年はちょうど学校の運動会と重なったのだが、子ども達はこの行事を楽しみにして皆で待ち合わせしてやってくる。数年前に面倒だからという理由で取りやめようという意見がでたが、今年になってこうした意見はなくなって若い世代が行事を残していきたいというようになった。昔あった婦人会や青年団はなくなってコミュニケーションの場が減っていることがその背景にあるようだ。こうした地区組織がなくなって負担が少なくなった背景もあるが、地区組織をなくしてきたことで田舎の良さも同時になくなってしまったという問題に気づき始めている若い世代もいる。私達やその上の世代から面倒だったらやめてもいいと意見すると、小学生の母親などが行事がなくなったら淋しいと話すようになった。矢熊区では道元忌をこのまま継続していくことにした。伊豆市内で同じような行事を行っている地区もたくさんあるが、残したいもの、残さなければならないもの、



地域の子ども達に伝えていきたいもの、そしてみんなの意見を聞いてやめても仕方のないもの、こうした区分けを皆で真剣に考える。これが地域の大人の役目で、世代を超えて考えていく必要がある。

座長 ○澤木さんから矢熊区の道元忌を事例に説明がされた。大学の私の講義に参加してくれた町田市生涯学習センターから高齢者の子育て支援グループについて紹介したい。この方たちは自分自身の子育ては終わっていて家族の中では祖父母の立場だが、それだけで満足しないで自分がこれまで蓄積してきた子育ての経験を下の世代に伝えたいと現役の子育て世代と話し合う交流会を実施している。ここでは頭ごなしに一方的に話さないことをルールに、自分たちの子育てノウハウを伝えていく勉強会を行っている。ここに私の学生、女子大なので女子学生が参加させてもらっている。子育て世代よりも下の近未来の母親世代が加わってワイワイやる、世代の枠を超えた子育て支援につながる活動だ。私は子育て支援は代行ではないと考えているので、こうした活動も子育て支援と位置付けている。

○田足井さん、木育の視点で高い年齢層の人達に対する働きかけがあればどんな活動か。

田足井 ○木育というと子どもを対象とした教育というイメージが強いかもしれないが、実際には年齢層が限られているわけではない。高齢者にも良い効果がある。私の地元の老人クラブに声をかけて木のおもちゃを持って訪問したところ、時の経つのを忘れて皆さん遊んでくれた。これを続けていくと集中力や人とのコミュニケーション能力などが養われる。高齢者になるとどうしても指先の機能などが衰えてくるが、指先を使って木のおもちゃで遊ぶことで楽しみながら機能維持がはかれる。

○子育て支援センターにも、子どもと母親だけでなく祖母が来る家庭もあって、こうした木育の輪の中にほかの高齢者が入ってもいいのではないかと考えている。伊豆市社会福祉協議会の子育て応援では子育て支援センターに講師を派遣するシステムがあって、これを活用して私は「木育ひろば」の活動を進めている。今秋にはお年寄りを招いて子育て支援センターの利用者と交流する場をつくる計画がある。子育て支援センターの活動そのものは、子どもとその親で留まってしまふことが多いものの、支援センターにいろいろな人が来て子ども達と交わる機会が持てるのはいいことだ。また、各地区で実施しているサロンは、本来は「子どもからお年寄りまで」という幅広い文句なのだが、実際には高齢者対象のサロンになっている。そこに夏休みなどの長期休暇中に子ども達が交わる計画を立てようとしている。たとえば、湯ヶ島の月ヶ瀬の人形劇では夏休み期間だったので中学生くらいまでの子ども達が高齢者やその世話をするボランティアの中年世代と一緒に観劇した。世代を超えたつながりが持てる活動だといえる。わざわざ新しく作るのではなく、支援センターやサロンといった今ある枠組みを上手に活用して、さまざまな世代が関わる機会を設けることを提案したい。

座長 ○「移住受入の支援促進」では2つ提案がある。青木さん、ご発言いただきたい。

青木 ○人づくりの括りの中で移住について考えると、差し迫った問題になってしまうかもしれないが、移住先としての伊豆市は環境が良い。伊豆市に住みたいと考える人に来てもらうには、こうした人達を受け入れる体制が地元にあった方が移住しやすい。また住む環境がいくら良くても実際働いて生活していくとなるとなかなか難しく、この問題は反対に伊豆市に住んでいる人が仕事

を求めて市外へ行ってしまふことも裏返しの関係にある。たとえば、子育て環境が揃っている他の市町に移住してしまうといった問題だ。市外から移住したいと考える人が移住できる環境があれば、伊豆市から人々が流出しにくいということだ。

○子育て世代に限って言えば、伊豆市の子育て世代が何に困っているか、これを確認するところから始まるのではないか。三島、沼津、伊豆の国の各市では困っていないような問題で、伊豆市の子育て世代が困っているとしたら、まずこうした問題について具体的に検討することだ。人間は社会的な生きものなので、助け合いの中で支え合って生きていくものだ。社会情勢が変化する中で、実際に人々が困っている問題は何か、この点を詳細に調べていけば地に足の着いた議論ができるはずだ。

座長 ○「伊豆市で子育てしませんか」がウリになればいいので、伊豆市ではこうした点が違うという特徴がはっきりわかるといい。今の指摘の中で伊豆市の現役の子育て世代が実際に何に困っているのかについては、おそらく旧 4 町時代にそれぞれの町が作成したエンゼル・プランや次世代育成支援行動計画を作っていく段階で把握していたのではないか。これを伊豆市になってから市全体での計画に統合する、すり合わせ作業は進んでいるのか。

健康福祉部長(フロア) ○伊豆市全体の次世代育成支援行動計画は 2 期目の計画を策定している。具体的な問題については、今年、支援計画を策定しなければならないことから、就学前の幼児では保護者全員に、学童の関係では小学生 500 人を対象にアンケートを昨年実施して、現在、それぞれの内容についてとりまとめ中である。まとめの途中段階だが具体的にはこども課長がある程度把握している。

こども課長(フロア) ○困っている事案の中では、まず急病の際にしてくれる人がいないという問題がある。市には病児保育があるが、この病児保育でも朝 8:30 以降でないに対応できないので職場に間に合わないために使いにくい、してくれる人がいないので親が仕方なく仕事を休むという声もある。それでも実際にはほとんどの人が子どものうちは親が看なければならぬと考えている。

○育児休業が終わって職場復帰するときに 0、1 歳児を預けることができる施設が少なくて困るという意見もある。待機児童は、統計上は 0 だが、0、1 歳児では現実には保育園や子ども園に入れない子どもがいることは確かだ。

座長 ○熱がある時や病気の時に子どもと一緒にいてあげたいという親の気持ちをくむとすれば、一緒にいたい時に一緒にいてあげるのが子育て支援だ。そうなると休業分の給与を補償することになるが、これは国や県のレベルで対応すべきことで、市がここまで対応することは現実的に不可能だ。ここまで対応したら財政破綻する。病児を受け入れる場所を作ることが、当面市ができる目標になろう。せっかくの機会なのでフロアからも何か提案があれば発言をお願いしたい。

高校生(3 年生、フロア) ○伊豆市には高齢者が多いので病院が込み合っている。私の具合が悪かった時に母が病院まで連れ添ってくれたが、診療待ちの人が多くて朝早く病院に行っても受診は昼頃になってしまったことがあった。

座長 ○病院が込んでいるとなると病院数が絶対的に足りないのではないか。これに市が対応できるか。

市長(フロア) ○さすがに病院の数や医師の数を増やすことは難しい。これまでこうした発想はなかったが、小中高校生が優先的に受診できるようにする、これなら市が進めることができるかもしれない。

○市ができることについて考えていくと、何故、日本ではこれほどまでに対応が難しいのか、という問いに突き当たる。日本では地方分権が進んでいないとする説もあるが、標準的な市では仕事量が多すぎるのが問題だ。アメリカやヨーロッパでこれほど市の仕事が多いところはなく、人口 3 万の伊豆市のような自治体が病院のことまで心配しなければならない、こんなところはない。カナダであれば州が、ドイツならばおそらく国が対処する。私の理解では、日本では国と地方政府、県や市町村



の仕事がうまく区分けされていないことが問題だ。この前提で伊豆市ができることを考えると、互いの譲り合いの中で子どもを優先する、これであれば地元の皆さんと話し合った上で市から声をかけて合意形成する、こうしたアプローチならば実現は十分に可能だろう。

○今年 12 回開催したタウン・ミーティングでも出生数が突出して少ないことが伊豆市の重要課題として掲げた。急速に進む少子化の問題は、財政問題よりも深刻だ。たとえば、病院で子どもが優先して受診できるといった対応ならば、市民の間で合意形成さえできれば予算ゼロで実現できる。伊豆総合高校の PBL 学習の中で、予算をかけないあるいは効果的に使う中で、市民の同意と努力で解決していく、このアプローチの仕方にヒントをいただいた思いだ。

座長 ○先ほど話に上がった「療養保育の無料化」についてはいかがか。

市長 ○病児保育を無料化してほしいという声は確かにいただいている。伊豆市では日赤病院の前のアパートの一室を借りて病児保育室を設けていて、利用には 1 人 1 日 2000 円かかる。また中学生までの医療費も、無料の自治体が多い中で伊豆市では 1 回 500 円にしている。「タダの行政サービスはない」という大前提があるからだ。小学生と中学生の通学のためのバス代を無料にしているのは憲法が「義務教育は、これを無償とする。」と定めているからだ。私自身は基本的に行政サービスでタダはないと考えているので、病児保育では一定の料金をいただいている。

座長 フロアから他に何かあれば。。

市民(フロア) ○菊地委員が指摘した「保健師がすべてを把握している」のは、保健師の数が多すぎるからではないか。子ども全員を見ている市が他にどこにあるのか。

○私は伊豆市の出身ではないが、伊豆市に来ていいものがたくさんあることがわかった。夜が暗い、そうすると星がこんなにたくさんあることがわかる。東京の夏は猛暑だが伊豆市ではクーラーが要らないほど涼しい。若者が外へ行ってしまうのは買い物があったらという理由だろうが、伊豆市の良いところを探し求めて、伝えていかななくてはならない。未来づくりセッションでは子ども宣言について議論してきたようだが、宣言では、子どもの権利条約を参考に、小中学生の生の

声を取り入れる、これらを考慮いただきたい。

座長 ○前回セッションで高校生の生(なま)の意見を貰った。青少年健全育成と言いながら大人だけで議論していても意味がないと私はいつも指摘する。前回来てくれた高校生では、伊豆市に残って良くしていきたい、伊豆市から出て戻ってきたい、そして市外に出て外から伊豆市を良くしていきたいと豪語する男子高校生もいた。それでも「伊豆が好きだ」という子どもを育てることが最も大切だと私は考えている。最も基本的なこととして伊豆市のどこがいいのか、市になって10年で改めてこの点について本格的に考えなくてはならないのではないかと。

○教育特区の関連で案外知られていないのが、伊豆市が自転車競技で有名なことだ。国体級の選手が合宿に来たり、競輪学校があるので多くの選手が輩出される。「3. その他 紹介された特徴ある活動の事例」の中に自転車をあげてもいいのではないかと宮地さんから提案された。現時点では自転車合宿は伊豆長岡に宿泊するようだが、これを修善寺に温泉付きの合宿所を造って泊まってもらう、これも検討できる。

○市長から要請があったのだが、「市民憲章」や「伊豆っ子宣言」を一つのスローガンとして決めていくときに入れるべきキーワードについて提言いただきたい。「自然」は既に挙げられているので、このほかの言葉でお願いしたい。

菊地 ○ひとつくり。。。 (笑)、これでは反則かもしれないので「一人ひとり」。

青木 ○「人を育てる力」。。。若者を育てる力があるか、地域が人を育てる力を持ちたい。

佐藤 ○「豊かな心」。先日も説明したように、天城小学校の子どもが挨拶する、土肥小学校の子どもが持っている他人を思いやる気持ち。伊豆は自然が豊かなので野の花や緑などの自然を見て素直に感じ取る感性、困っている人を助ける、友達に親切にする。こうしたさまざまなものが豊かな心に入ると私は考える。

宮地 ○「食を大切にする」。食事や栄養などすべてを含めて。

田足井 ○「やりとおす力」。。。。

澤木 ○「地域力」について考えてほしい。その中には是非とも伊豆市ならではの文学や文化を入れたい。少し長くなるが、地域力を高めていくには、どの地区にもある集会所が充実させる。そうすれば小さなコアの中で解決できることもある。たとえば、その地区の子どもの具合が悪くなくても、生まれた時から知っている子ならば地域の中で時間に余裕のある年代の人が集会所でその子の面倒を見ることができる。こうすればお金は必要ないが、施設を充実させることが必要だ。

原 ○私は一貫して「親孝行」あるいは「孝」、もう一つは「貢献」を入れてほしい。

○先ほど提案された病院の順番はシルバーシートの逆で、たいへんな母親を助ける学校優先にあたる。導入するのがいいと思う。

座長 ○ありがとうございました。提案された言葉をすべて入れて作るのは難しいかもしれないが、

考えていきたい。原さんが上げた「貢献」は学校教育の目標として挙げているところがある。日本の学校教育はこれまで個人に焦点をあててきたが、これを転換することにもなる。

○伊豆市版の幼稚園教育のカリキュラムや幼稚園と保育園の連携や統合では、私の専門のニュージーランドでは、1996年に就学前のすべての子どもを対象にしてカリキュラムを統一した。この統一されたカリキュラム「テファリキ」は、マオリ語で「編まれた織物」という意味で、幼稚園や保育園のほか6-7種類もある、どの教育施設に行っても共通の行動目標のもとでの教育が展開される。日本のように幼稚園と保育園が別々の指針では、居場所によって教育が異なるので平等の原則に反する。したがってニュージーランドではどこに住んでいても子どもに支給される補助の額は同じだ。伊豆市版で考えれば、幼稚園であっても保育園であっても共通にして、0-5歳までを一つの流れにカリキュラムを構成する、こうしたモデルで考えていくことだ。

○子育て世代を対象にした人づくりでは、ニュージーランドに70年ほど前からある保護者たちによる子育ての相互支援活動のプレイセンターが参考になる。行政やNPOにやってというのではなく、自分たちでやってしまう文化がニュージーランドにはあって、自分たちの子育てノウハウを後輩たちに伝える人がいる、親たちが交替で面倒を見合う活動がある。これが私自身の研究対象なので、三島をベースに日本でも同じような実践活動を進めようとしている。これが親世代を育てていく一つの手掛かりになると考えている。

○3回にわたるセッションで議論を進めてきて、どのような形でまとめられるか、今の段階ではわからないが、市になって10年、本当の意味で伊豆市について考えるためのスタートでしかない、このことがわかった。

○私は、清水町の出身なので、このセッションで自分の町である清水町について振り返るよい機会になった。葦山高校卒なので伊豆市エリアには昔から馴染みがあって、水恋鳥広場や土肥の海には子どもを連れてよく遊びに行った。その意味では私はよそ者だが伊豆市が好きだ。中伊豆も天城湯ヶ島も面白い。今後も何らかの形で伊豆市のお手伝いをさせていただければと思う。

○これで3回のセッションがすべて終了する。発言し忘れたあるいは付け加えたい点があれば気軽に伝えていただきたい。11月16日にもう一方の成長戦略と財政のセッションと合同で全体セッションが開催される。是非参加いただきたい。

